

## 最優秀賞

# 他人様を思う心

加藤 博子

千葉県



「おばあちゃん、ただいま。おやつ何？」お勝手の引き戸をガラガラッと勢いよく開け、息せき切って飛び込んできた私に「ねえちゃん、裾風立てる人は出世しねえよ。」蒸しあがったばかりの枝豆を笹に取りながら祖母が静かに言った。「すぞかぜ？」「ああ、ばたばたおおきないっかい音たてて無神経なマネするのは、だめだってこと。」「ふうん。」湯気が立ち昇る枝豆に私は早速手を伸ばした。「学校で廊下は走るなって言われるだろう。何でか解るかい？」「転ぶと危ないからだよ。」「そればかりではないばかりではない。本読んでる人、話してる人、学校にはいろんな人がいるだろう。中には具合悪い人もいるかもしれねえ。他人様に気遣いしないでバタバタ走ってどうするね」「そうか。それが裾風か。」私は即座に納得した。祖母は田舎のばあさんだったが、マナーに関しては一格言ある人で、私に色々な事を教えてくれた。月に一度巢鴨のお地蔵様に市が立つと、幼い私の手を引き、電車で小一時間の距離を参詣に出向いた。その道中も「ねえちゃん、人の多い所じゃ背中に目つけて歩くんだよ。急ぐ人の道塞ぎになっちゃいけねえ」「電車で立ってる時は、他人様の頭の上でいっかい声でしゃべっちゃいかん。」時に口うるさいと思うほどの指導があった。「なんでそんなに他人様を気にするの？」と問いかけると、祖母はこんな話をしてくれた。「うちの本家は長屋門のある名主なぬしで、広い風呂があった。本家の爺さんは終戦後、戦地から引き上げてきた兵隊さんを見ると、『ご苦労様でした。』と誰彼かまわず飯をふるまい風呂に入れた。あたしも手伝いに行ったが、あれほど汚れた兵隊さんが使った後の風呂なのにちっとも汚れていないんだよ。どの人もそうだ。それが昔の日本人だよ。他人様に対する礼儀がしっかり身についてたよ。礼儀ってのはな、相手を思う気持ちなんだ。だからねえちゃんにも、ちゃんとした日本人になってほしいんだ。」祖母はそう言って私の頭を撫でた。